

ソフトバンクグループ株式会社 2023 年 3 月期第 2 四半期 投資家コール質疑応答録

開催日:2022 年 11 月 11 日(金)

登壇者:取締役 専務執行役員、CFO 兼 CISO、財務統括 兼 管理統括 後藤 芳光
常務執行役員、経理統括 君和田 和子
SB Investment Advisers, Managing Partner CFO, Navneet Govil
Arm, VP Investor Relations, Ian Thornton

質疑応答

質問者 1

Q1:

社長(孫 正義 代表取締役会長兼社長執行役員)の発表を今日拝見して、Arm に集中したいというお話でした。今後社長が関わらないこと、例えば意思決定などにはもう関わらないとか、Vision Fund の投資決定などには関わらないとか、または他の投資に関してはもう関わらないとか、例えばどういう役割を今後されていくのでしょうか。

A1:

(後藤) 孫さんの今後の役割として大きな役割は何も変化はありません。彼はグループの CEO であり、グループのハイレベルな意思決定には全て参加していきます。ただ、今までよりも彼は仕事を下ろしていくということですので、決算に関しては、CFO の私のチームとグループのメンバーで対応する形に今後は変化させていきます。また、Vision Fund についても、ハイレベルな意思決定については、孫さんが重要な役割を引き続き担いますが、ハイレベルでない意思決定については、Vision Fund の管理部門のメンバーやその他のマネージングパートナーたちに役割を分担していくことになると思います。

質問者 1 確認ですが、そうすると、例えば新しい投資のときの創業者たちとのやりとりなどには関わっていかれるのでしょうか。

(後藤) その投資先の規模によって、彼が会うケースと、他のシニアメンバーが会うケースと分かれて、今までよりそのあたりは細かく分担が分かれてくると思います。

Q2:

分かりました。もう一つお願いします。パイバックについて、10 月はかなりアクティブに行われたと思います。特にこの月になぜこれだけ金額が大きく膨らんだのですか。価格が上がっていたにもかかわらず、なぜこんなに大きく買い込まれたのでしょうか。

A2:

(後藤) 一番大きな要因は、この数週間出来高が急速に大きくなったことだと思います。自社株買いの進め方については、決算が終了してインサイダーがいったん解除になった時点で、次の決算までの 3 カ月間の買い方についてわれわれが信託銀行との間で事前にルールを決めるわけです。いったん決めたルールは次の決算が明けるまで変更することができませんので、その間はマーケットの出来高ボリュームの増減に伴い、われわれの買い付けも増減ということが生じます。従って、出来高が大きい場合にはその分買い付けのスピードが早まるという結果になりますが、この数週間はそういった現象が、まずテクニカルには大きな要因だったと思います。

質問者 1

なるほど。ありがとうございました。

(後藤) ありがとうございます。

質問者 2

Q1:

Navneet さんに Vision Fund のことをお伺いしたいのですが、この四半期では未上場株の公正価値の減額が大きかったです。逆に言えば、厳しく査定したということで将来さらに減額されるという懸念が薄まったかとも思うのですが、上場の同業会社の株価はそこまで下がっていないような気がします。事業面をより厳しく見たということなのか、そのあたり、大きく公正価値を減額した要因として一番大きかったものは何でしょうか。

A1:

(Govil) パフォーマンスを見るのであれば、write-down とベンチマークで比較していただきますと、Vision Fund と LatAm は 2022 年 1~9 月の 9 カ月でざっくり 37% 減少しています。ナスダックがざっくり 32% 減、Refinitiv Venture Capital のインデックスが 58% 減です。なので、われわれのケースはどちらかというとなスダックより少し上回るぐらいです。ナスダックよりも高いベータとなりますが、Refinitiv Venture Capital インデックスと比較すると少ないです。理由としては、多くの投資先が非常に潤沢な資金を持っており、またビジネスモデルも十分に証明されていて、かつユニットエコノミクスがプラス、または収益化に向かっているからです。ですから、一般的なベンチャーキャピタルのインデックスと比較すると、その影響は小さいということになります。ただ一方で、write-down はパフォーマンスなどを見て慎重に行っています。

先ほどおっしゃった上場株との比較ということになりますと、上場株のマルチプルはここ数年で下がっていて、それがわれわれのバリュエーションに反映もされています。もう一つわれわれのバリュエーションに反映されているものとして、マクロ経済環境が全体的に軟化しているため、投資先企業の今後 1 年、3 年、5 年の見通しを下方修正しており、これが投資先企業の価値に影響を及ぼしています。多くの上場企業は、マルチプルが下がっているにもかかわらず、業績見通しを引き下げていません。われわれはかなり慎重に、非上場株については上場株に比べて下げているという状況だと理解いただけたと思います。

質問者 2

7~9 月の 3 カ月だけを見ると、ナスダックは 6% ぐらいしか下がっていないと思います。今ご説明にあったように、よりプルーデントに公正価値を厳しく下げたということなのでしょうか。

(Govil) そのように見ていただいて結構かと思います。

質問者 2

ありがとうございます。

質問者 3

Q1:

Ian に質問です。ひよっとすると Arm の四半期決算は半導体の業界全体に関係するかもしれませんが、また、ライセンス収入の状況とも併せて少しお伺いしたいのですが、いかがな状況でしょうか。

A1:

(Thornton) ご質問ありがとうございます。Arm の事業を見ていただきますと、収入は二つに分けられます。一つはロイヤルティーで、もう一つはライセンスとなります。まず 22 年上期につきましては、ロイヤルティー収入が過去最高となり、主要なセグメントであるモバイル、インフラ、自動車、IoT、全てで収益が増加していました。

幾つかの半導体業界のニュースなどでご覧になると、一部の企業と対照的に見えるかもしれ

ませんが、この業界は均質ではありません。業界の中に幾つか違うセグメントがあります。例えばクリプトマイナー(仮想通貨の採掘企業)にグラフィックカードを販売していたり、PC 向けにチップを販売しているのであれば、おそらく収益は少し圧迫されていることでしょう。スマートフォンや法人用ネットワークのチップだったり、自動車用のチップだったりを販売している企業は、実際には非常に堅調な決算を発表しています。STMicroelectronics や Qualcomm などは 30%増の売上成長を今回報告していますし、TI や XP は 20%ほど上げています。Arm のロイヤルティ収入が前年対比で 22%上がっているというのは、多くこのような企業に実際に Arm のプロセッサを使ってもらっているからということになります。

なので、業界の堅調な成長と、幾つかのマーケット・シェアの獲得が組み合わさり、スマホや車などに入っていきチップがよりスマートになり、そして、Arm 技術が必要とされて、ロイヤルティが非常に上昇傾向にあるということが言えるかと思います。ですから、いろいろな要素が組み合わさって、結果としてわれわれの好決算につながったと思います。

また、ライセンス収入は前年同期比で下がっていますが、これは主に昨年上期との厳しい比較によるものです。Arm のビジネスについてよくご存じの方は覚えていらっしゃるかもしれませんが、ライセンス収入というのは結構上下するもので、大きなジャンプが昨年の第 2 四半期にありました。これは元々2020年に契約が行われたもので、それが結果として期ずれでライセンス収入として昨年計上されたものになります。それによって apple-to-apple での比較が難しくなっていますが、今年の上期は実際にはライセンシングでも過去に比較しても 2 番目に大きい収益となり、かなり堅調な動きを見せています。結果、ソフトバンクグループによる買収後、かなり R&D なども加速して進めています。

ご存じのとおり、最初の 2~3 年は Arm の利益率は 50%から 20%、10%と下がっていました。それが底を打ってまた 50%に戻ってきたという形になります。これは新しい技術への投資が実際に実を結んできて、ライセンスにつながっているという状況です。その結果として、ライセンス収入が全て結果として前年対比で増加していることが出ているかと思います。

Arm を業界全体と比較して見ていただきますと、全体の業界の下降傾向がありまして、そのサブセグメントにしても、成長しているようなところ、例えば携帯や自動車などはありますが、チップがスマートになり、そしてシェアが上がっていけば、われわれにとってまだまだ追い風だと思っています。結果として多少の減少があったとしても、それを凌駕すると思っています。

Q2:

一つ追加で質問させてください。Qualcommに関連して何かコメントできますか。彼らとのライセンスに関する合意ができないなどです。

A2:

(Thornton) 今おっしゃっているのはわれわれの訴状についてですかね。われわれは今回デラウェア州で Qualcomm に対して訴状を出しています。幾つかの不適切な IP の利用があったということで、それは Arm と Qualcomm と Nuvia という会社の間での合意事項に反するものでした。ぜひ Web に載っております訴状を見ていただきますと、全てこちらに書いてありますので、これをご覧いただければご理解いただけるのではないかと思います。このコールで全てをお話しするのはなかなか難しいので、もちろん Qualcomm からはわれわれの訴状に対して反対の意見もありますが、現在は判事に委ねたという状態になります。われわれとしては判事からも賛同いただけるとなっています。

質問者 3

ありがとうございます。

質問者 4

Q1:

プレゼンの中で、継続して資金化されるということでしたが、詳しく IPO マーケットの今の状況を見ますと、どのカテゴリーで、どのセグメントで今後資金化を継続していくのでしょうか。

Vision Fund の中で売却される未公開株なのか、あるいは Vision Fund の中の公開株や一般公開株で継続的に売却が行われるのか、こういったところでしょうか。

A1:

(後藤) IPO マーケットの環境を鑑みますと、Vision Fund のポートフォリオの IPO が次々と出てくるとは考えにくい状況だと思います。このあたりは後ほど Navneet さんからもコメントいただければと思います。基本的には、ソフトバンクグループとしての保有資産、上場株、例えばアリババ株であったり、また現在保有している T モバイル株であったり、こういったものは今後もプログラムに乗って調達を進めるものもありますし、また、環境を見ながらアセットバック・ファイナンスなどを行う可能性も十分にございます。また、ソフトバンクグループとしての社債の起債なども環境を見ながら進めていきたいと思っています。

Vision Fund のポートフォリオの IPO については、Navneet さん、どうでしょうか。

(Govil) ありがとうございます。幾つか念頭に置いていただきたいことがあります。Vision Fund、LatAm を合わせて開始以降 47 社の上場がありました。それに加えて今 10 社、Vision Fund 1 と 2 の中で公開もしくはコンフィデンシャルにファイリングをしているものがあります。470 社の投資先があり、フェア・バリュエーション・ベースで 26 社、約 27 billion ドルのフェアバリュエーションです。これは全てレイトステージで、シリーズ E、もしくはそれ以降のものとなります。そのほとんどが IPO の準備ができています。例えば大きな銘柄でいきますと、Arm、ByteDance、Fanatics、GoBrands などがあります。それに加えて、上場株となりますと、こちらは大体 25 billion 相当というのが 9 月末の時点の数字となっています。私たちの持っている IPO のパイプライン、株式公開を終わらせている企業、上場株、こういったものを全て合わせると、適切なタイミング、適切なバリュエーションで資金化できる、かなり大きなポートフォリオだと言えると思います。

質問者 4

ありがとうございます。それにフォローアップとしてお聞きしますが、T モバイル、それから Arm、SBKK について、AI、5G といったところで何かシナジーを考えられるもの、それによって追加の収入などを見込めるものはありますか。

(後藤) 今具体的に名前の挙がった、例えば T モバイルや SBKK、Arm など、直接具体的なシナジーを出すためのビジネスの新たな取り組みなどが行われているわけではないと思います。ただ、いずれの企業も AI や通信サービスのビジネスと非常に親和性の高い企業ですから、これがそれぞれの強みをお互いに提供し合いながら新たなビジネスに取り組める可能性は大いにあるだろうと思っております。そこに Vision Fund の投資先など、さまざまな企業家たちの新たなアイデアなどを組み入れていく。

SBKK がわれわれのグループにとって重要なのは、グローバルにさまざまな新しい IT 技術やビジネスモデルを日本に輸入する代理店的役割があり、この役割が大変われわれにとって魅力的な役割です。そういった部分でさまざまなパフォーマンスが今後出てくれることを期待しています。

質問者 4

ありがとうございます。

質問者 5

Q1:

先ほどの質問のフォローアップで、この四半期を見ると、Vision Fund のエグジジットが少なくなっているように思うのですが、その背景というのは IPO 市場の形態というところが大きいのか、そもそもだいが売却してきたというところが大きいのか。特に伺いたいのが、下期に IPO 市場の回復次第でエグジジットが増えてくるのか、もしくは少しペースとしてはスロー

ダウンしていくのかというところを、まず 1 点お伺いさせてください。

A1:

Vision Fund の創立以降、既に 52 billion ドル以上の配当を LP に返しています。非常に規律ある資金化戦略を持っています。9 月期に関しましては資金化は少なかったということになりますが、これは上場株の株価が低かったことが主な理由だと思います。もちろんアセットポジションやターゲットレベルなどについてはご紹介しませんが、非常に規律ある形で行っているとは言えると思います。私の方から何が次の四半期に来るかということは申し上げられませんが、IPO マーケットについては、現在はそれほど魅力的であるとは言えません。もちろん Mobileye は IPO をして成功しましたが、一方で、投資先においても 26 社がレイトステージで、キャピタルマーケットでより良いバリュエーションを吸収できるとなれば準備ができております。しかし、資金化戦略については非常に規律ある形で行っておりまして、実際に今、閾値などを持ちまして資金化を行っております。

Q2:

ありがとうございます。先ほどの質問のフォローアップで後藤さんにお伺いさせていただきたいのですが、ここからもアセットバック・ファイナンスをご検討されていらっしゃるというお話で、まず今回、アリババのマージンローンを返済された背景というところ、あとは、Arm も使っている状況なので、アセットバック・ファイナンスとしてどういったところが候補に挙がり得るのかお伺いさせてください。

A2:

(後藤) アセットバック・ファイナンスの対象アセットとして最も使いやすいのは、流動性の高いアリババの株だと思います。また、一部既にプログラム化されていますが、T モバイルの株式もまだ活用の余地があると考えていますし、その他、規模の小さいものはまださまざまな余地があるものもごございます。また、1~2 年というタームで考えていく資金計画的に見ますと、やはり Arm の IPO というのは非常に大きなイベントになるでしょうし、上場後の Arm 株というのは、そういったアセットバック・ファイナンスの材料としては大変活用しやすいアセットになるだろうと考えています。

Q3:

今回、アリババ株のマージンローンを返済された背景はどういったところにあるのでしょうか。

A3:

(後藤) マージンローンとして調達をするよりも、株価の今後を見つつ売却を先物として確定させながら、オプションとしてファイナンスを継続することができるデリバティブ取引の方が、今の私どもの戦略上適しているだろうと考えて、マージンローンについてはいったん終了して、ファイナンスを切り替えていったということです。

質問者 5

ありがとうございます。よく分かりました。

(後藤) ありがとうございます。

質問者 6

Q1:

Ian をお願いします。Arm に関して、利益率はどれぐらいかお話しいただけますか。例えばここ 1 年ぐらい、またこの四半期、今どのような影響が利益にありますでしょうか。

A1:

(Thornton) ソフトバンクグループによる買収以降の利益ですが、例えば買収前は 50% ぐらいであり、その後、R&D 投資をかなり加速し、またエンジニアを増やすことを行いましたので、われわれの利益率は 2017 年、2018 年、2019 年に関しては下がりました。2~3 年かけて構築していくということで、その間は特に販売をするものがありませんでした。2018 年、2019 年は特に利益が回復をし始め、商品がさらに出てきて、われわれとしては非常に柔軟なビジネスモデルに対応し、さらに新しい Arm の技術を使っただけになったということで、そのあたりから利益率が 50% レベルまで復活したということになります。

22 年上期に関しては、21 年、前年度対比で見ますと、ライセンス収入としては最高益だったと言えます。1 年前 200 million ほどの売り上げだったのが、ライセンスで 100% 利益となりますので、それがボトムラインに直結しますので、利益率は 1 年前に比べて今日現在は大きく違います。そういった意味で、上期としては 22 年は非常に堅調であります。

また、今後につきましては、中期で考えますと恐らく少し業界が、例えば消費者のスマホの購入やテレビの購入などが減ってくるというような影響があるかもしれませんが、例えば車やテレビやホームカメラの商品がよりデジタル化されていって、チップが必要だという状況になるかもしれませんし、そういったものは Arm ベースになるでしょう。ですから、われわれの事業機会は実際には増える一方であると言えます。また、Arm 技術がいろいろな意味で使いやすいということもあり、われわれのコストよりも利益が先んじて出るだろうということで、マージンは今後も成長すると想定しています。

質問者 6

ありがとうございました。

質問者 7

Q1:

質問の機会をありがとうございます。トピックとしては一つなのですが、大きく二つ質問がございます。Vision Fund と Arm がパフォーマンスとしては少し下がってきていると思うのですが、今、LP の方たちがどのように感じていらっしゃるか、どのように SBIA に要求をしてくているのかを少し教えてください。

A1:

(Govil) Vision Fund 1 のパフォーマンスにつきましては、9 月末時点で 87.7 billion ドルの投資を行いました。公正価値が 103.1 billion ドルです。ですから公正価値は獲得コストを超えていますし、また、投資コストも超えています。LP から見ますと、われわれは既に 43.2 billion の配当をしておりますので、大体 50% ぐらいの Vision Fund 1 への投資が LP にリターンできたと言えます。

Q2:

2 点目としては、Arm の上場が Vision Fund 1 にとっても非常に重要なファクターになってくるのだと思います。この辺と、孫さんが Arm にどっぷり行かれるということと少し関係があるのかなというのを、差し支えない範囲で教えていただければと思っています。

先ほども質問が出たのですが、改めて孫さんの Arm での役割といいますか、以前、Sprint などに入られたときは、チーフ・ネットワーク・オフィサーということで、ネットワークの質を改善するのだという非常に明確な目標があったわけですが、今回 Arm に関して、上場すれば孫さんは肩の荷が下りるといえるのか、少し戻ってこられるような形になるのか、上場以降ももう少し関わっていかれるような形になっているのか。その辺を少し差し支えない範囲で教えていただくと幸いです。

A2:

(後藤) 孫さんが、これから Arm の企業価値拡大のために自分の時間を十分使いたいという説明をしましたが、Arm の経営陣と一緒に、Arm の素晴らしい技術力を活用してさまざまな

サービスを開発しながら展開していくために、彼はたくさんの時間を必要としていると考えています。

IPOは、会社の成長過程における一つのステージだと思っていますので、IPOが達成できたらそこで孫さんの Arm の企業価値拡大のチャレンジが終わるというわけではありません。彼はもっと長い時間をかけてこの会社の価値を最大限引き伸ばしていくという、大きな期待を持って取り組むことになると思います。彼自らが彼の成果を発表するときが来るまで、もうしばらくお待ちいただきたいなと考えています。もちろん株主総会では、彼は株主の皆さんに対して1年間の総括をしてくれることについては問題ないと考えています。

質問者 7

ご丁寧にありがとうございました。

質問者 8

Navneet をお願いします。決算説明会資料 32 ページと 33 ページについてです。Vision Fund 1、2 の数字だと思います。

32 ページ

Vision Fund 1 の方は投資額が 89.4 billion、そして 102.9 billion が累計投資成果です。エグジットなどもあるかと思いますが、上場株が 32 billion、これで価値が 21 billion なので、30%ぐらい価値が減少していると思います。プライベート企業の価値を見ますと、35 billion です。フェアバリューと価格が高くなっていて、39.3 billion と上がっています。

われわれは外にいるとどうやってこれが計算されているか分かりません。外から拝見すると、プライベート企業は上場株に比べて違う結果が出ているように思います。フェアバリューを使って NAV を計算されていると思いますが、この数字についてどのような理由で信頼すればよいのでしょうか。

33 ページ

Vision Fund 2 の数字では、プライベートの方が 40 billion から 29 billion と 30%ぐらい下がっています。上場株は、同じ投資先で 8.2 billion から 3.5 billion に下がっています。これは 60%減になります。この数字はどう裏付けされているのでしょうか。

(Govil) 大事なことは、一つのプールで見ないことだと思います。これら投資をそれぞれ一般化することはできないと思います。まず Fund 1 で見ていただきますと、プライベート、未公開投資先の数字が良くなっているのは、特に二つの大きないい投資があったからです。一つは ByteDance、もう一つが Fanatics で、大きな益がこの二つの非公開投資で出たということになります。上場株については、Fund 1 では特に一つの投資が大きく毀損されました。これが DiDi です。覚えていらっしゃる通り、結構大きな投資を DiDi にしてしまっていて、マークダウンも今回かなり大きいです。これが OTC マーケットという形になります。

このように個々の銘柄を見ていただいて、公開・未公開で比較していただく必要があると思います。そういった意味で、パーセントでは一般的に一概には言えないと思いますし、これがリーズナブルかどうかという判断はできないと思います。個々の銘柄を見ていただいて、プールで見ずに個々で見ていただくということが必要なのではないのでしょうか。

質問者 8

分かりました。こちらはまたアップデートしていただければと思います。

(Govil) もちろん幾つか開示をしていますので、こちらを見ていただければいいと思います。Vision Fund 1 については大きな LP、それからインデペンデントバリュアー(独立評価人)がおります。われわれだけではなく、LP 側にも独立評価人がおりますし、ファンドの監査、それから SBG レベルでの監査も行っています。

何度も以前に申し上げておりますが、われわれの評価プロセスというのは三角法を使っておりまして、まずパフォーマンスを見る、ディスカウントキャッシュフローで見る。それから、上場株の企業等の比較をする。それから直近の調達ラウンドで見る。これが基本的には評価方法の基となり、透明であるということです。だから、われわれは鉛筆をなめて何かを書いているわけではないと理解していただければと思います。よろしくお願いたします。

質問者 8

はい。ありがとうございます。

質問者 9

Q1:

まず後藤さんをお願いします。これまでバイバックを非常にアグレッシブに行われて、前四半期の 10 月、11 月も行われたということでした。お伺いしたいのは、今後のバイバックの機会をどのように考えていらっしゃるか、会社として今後のバイバックをどのようにお考えかです。お願いたします。

A1:

(後藤) 会社として株主還元は非常に重要な課題という認識です。これはわれわれが常に検討しているテーマです。その株主還元の手法としては、やはり自社株買いは最も有効な手法だろうと考えています。従いまして、今後ももちろん検討していきますが、今いったんプログラムが終了した状況です。今後の取り組み方については、また取締役会でしっかりと議論をしていきたいと考えています。

Q2:

二つ目は Navneet さんをお願いします。厳しいマーケットの状況で、新しい投資はされていないということでした。そうすると、どのようなセクターまたはエリアについては、新規投資をやってもいいと思っいらっしゃるのでしょうか。今後の見通し、どこを特に見ていらっしゃるか、前四半期からどのようにご覧になっているか、お願いたします。

A2:

(Govil) ありがとうございます。われわれの見方としては、AI 革命で幾つかのセクターが影響を受けていると思います。(11 月 14 日に開催の)投資家向け説明会でもハイライトとして幾つかの投資先を挙げています。デジタルコマース、サプライ・チェーン・トランスフォーメーション、金融、人材管理ソリューション、データ分析やセキュリティ、こういったところは AI 革命のいい影響を受けているところとして注目しています。

質問者 9

ありがとうございます。

質問者 10

Q1:

暗号通貨へのエクスポージャーについて何かお話しただけことがあれば、ぜひお願いたします。

A1:

全体の投資先を見ていただきますと、全てのファンド、つまり Vision Fund 1 と 2、LatAm を合計すると、145 billion の公正価値となります。それに対して暗号通貨へのエクスポージャーは 1.3% となります。

質問者 10

ありがとうございます。

質問者 11

Q1:

Navneet さんへの質問なのですが、決算短信などを見ていると、9 月末で Vision Fund 1 や Vision Fund 2 がアセットバック・ファイナンスでかなりの借入金を持っているのですが、どうしてこんなに借入金をアセットバック・ファイナンスで増やしているのか。かなり大きいので、その背景をご説明いただければと思います。

A1:

(Govil) こちらはこれまで継続して行ってきたものです。マージンローン、または上場株を使ったもので、全体金額が 10 billion ドルぐらいになると思います。こちらは loan-to-value だと大体 13.6%になるでしょうか。かなり慎重な金額と言えらると思います。結果として、LP にリターンできます。それから、ファンドのパフォーマンスを上げる、IRR を上げるという意味で効果的だと思います。一方、Vision Fund 1 については、ファンドレベルファシリティを組んでおり、こちらは 9 月末ではドロウしていないものになります。

質問者 11

ありがとうございます。

質問者 12

Q1:

どなたに聞いたらいいかわからないのですが、Arm IPO についてです。これが少し遅れています。キャピタルマーケットの問題なのでしょうか。事業をさらに成長させたいからなのか、IPO のタイミングは何が理由となって少し遅れているのか。これはキャピタルマーケット以外に理由があるのでしょうか。

A1:

(Thornton) Arm は IPO の準備は万端ですし、事業の方も十分に準備万端です。ご覧になったとおり、社外役員や新しい CFO の任命も終わっています。IPO 経験の豊かな方たちに集まっています。ドキュメンテーションも十分に準備を進めていますし、ファイリングに対しても準備ができています。結果としては、世界経済と、それから金融マーケットの組み合わせの要素があるかと思いますが、こういった中でわれわれとしては、今年度というくくりでは IPO は難しいかもしれませんが、暦年で 23 年中にできればと見えています。

Q2:

例えば NVIDIA の株価の低下などが影響して、IPO の考え方で二の足を踏んでいるというようなことはありますでしょうか。

A2:

(Thornton) 全くないです。後藤さんや Navneet に他の考え方があれば別ですが、われわれとしては特にそういったものが影響しているものは何もありません。

質問者 12

ありがとうございます。

※括弧内は IR 部加筆

免責事項

本資料は、ソフトバンクグループ株式会社(以下「SBG」)及びその子会社(Arm Limited を含み、以下 SBG と併せて「当社」)並びに関連会社(以下当社と併せて「当社グループ」)に関する関連情報を提供するものであり、すべての法域において、いかなる証券の購入又は応募の申込みを含む、いかなる投資勧誘を構成又は形成するものではありません。

本資料には、当社グループの推定、予測、目標及び計画を含む当社グループの将来の事業、将来のポジション及び業績に関する記述など当社グループの将来の見通しに関する記述、見解又は意見が含まれています。将来の見通しに関する記述には、特段の限定を付すことなく、「目標とする」、「計画する」、「確信する」、「希望する」、「継続する」、「期待する」、「目的とする」、「意図する」、「だろう」、「かもしれない」、「であるべきである」、「したであろう」、「できた」、「予想する」、「推定する」、「企図する」若しくは類似する内容の用語若しくは言い回し又はその否定形などが含まれています。本資料に記載されている将来の見通しに関する記述は、当社グループが本資料の日付現在において入手可能な情報を踏まえた、当社グループの現在の前提及び見解に基づくものです。これら将来の見通しに関する記述は、当社グループのメンバー又はその経営陣による将来の業績を保証するものではなく、当社グループのビジネスモデルの成功、当社グループの資金調達力及びその資金調達条件の影響、SBG の重要な経営陣に関するリスク、当社グループの投資活動に関する又はこれに影響を与えるリスク、SB ファンド(下記で別途定義)並びにその投資、投資家及び投資先に関するリスク、ソフトバンク株式会社及びその事業の成功に関するリスク、法令・規制・制度などに関するリスク、知的財産権に関するリスク、並びに訴訟を含むこれらに限られない既知及び未知のリスク、不確実性その他要因を含み、これらの要因により、実際の当社グループの実績、業績、成果又は財務状態は、将来の見通しに関する記述において明示又は暗示されている将来の実績、業績、成果又は財務状態と著しく異なる可能性があります。当社グループの実績、業績、成果又は財務状態に影響を与える可能性のあるこれら及びその他の要因については、SBG のホームページの「事業等のリスク」(https://group.softbank.ir/investors/management_policy/risk_factor)をご参照下さい。当社グループ及びその経営陣は、これら将来の見通しに関する記述に明示されている予想が正しいものであることを保証するものではなく、実績、業績、成果又は財務状態は、予想と著しく異なる可能性があります。本資料を閲覧する者は、将来の見通しに関する記述に過度に依拠してはなりません。当社は、本資料に記載される将来の見通しに関する記述その他当社が行う将来の見通しに関する記述を更新する義務を負いません。過去の業績は、将来の実績を示すものではなく、本資料に記載される当社グループの実績は、当社グループの将来の実績の予測若しくは予想の指標となるものではなく、又はこれを推定するものでもありません。本資料に記載されている当社グループ以外の企業(SB ファンドの投資先を含みますが、これに限られません。)に関する情報は、公開情報等から引用したものであり、当社は、情報の正確性又は完全性について保証するものではありません。本資料には、Arm Limited に関する記述が含まれています。これらの記述は、SBG の株主への情報提供のみを目的としたものであり、Arm Limited が発行するあらゆる有価証券の販売又は購入の勧誘を目的としたものではありません、そのように解釈されるべきではありません。

商標について

本資料に記載されている企業、製品及びサービスの名称は、各企業の商標又は登録商標です。

重要なお知らせ—SBG の普通株式の取引、スポンサーなし ADR(米国預託証券)に関する免責事項

SBG の普通株式の売買を希望する場合には、当該普通株式が上場され、主に取引が行われている東京証券取引所において売買を行うことを推奨します。SBG の開示は、スポンサーなし ADR(以下「ADR」)の取引の促進を意図するものではなく、ADR の取引判断を行う際にこれに依拠すべきではありません。SBG は、SBG の普通株式に関するスポンサーなし ADR プログラムの設立又はそれに基づき発行される ADR の発行若しくは取引について、過去及び現在において、参加、支援、推奨その他同意を行ったことはありません。SBG は、ADR 保有者、銀行又は預託機関に対して、(i) SBG が 1934 年米国証券取引所法(以下「証券取引所法」)で定めるところの報告義務を負うこと、又は、(ii) SBG のホームページに、SBG が証券取引所法ルール 12g3-2(b)に従って証券取引所法に基づく SBG の普通株式の登録の免除を維持するために必要な全ての情報が継続的に掲載されることを表明するものではなく、また、当該者又は機関は、そのように信じてはなりません。適用ある法が許容する最大限の範囲において、SBG 及び当社グループは、SBG の普通株式を象徴するスポンサーなし ADR に関連して、ADR 保有者、銀行、預託機関その他企業又は個人に対するいかなる義務又は責任を否認します。上記の免責事項は、ソフトバンク株式会社や Z ホールディング株式会社などの、スポンサーなし ADR プログラムの対象であるか又は将来対象となる可能性のある当社グループの証券と同様に適用されます。

本資料に記載されるファンド情報に関するお知らせ

本資料は、情報提供を目的として提供されるものであり、法律上、税務上、投資上、会計上その他の助言又は SB Global Advisers Limited(以下「SBGA」)、SB Investment Advisers (UK) Limited(以下「SBIA」)及びそれらの関係会社を含む SBG の子会社(以下併せて「SB ファンド運用会社」)により運用されるいずれかのファンド(文脈に応じて、パラレル・ファンド、フィーダー・ファンド、共同投資ビークル又はオルタナティブ投資ビークル)と併せて「SB ファンド」)のリミテッド・パートナーシップ持分又は同等の有限責任持分の販売の申込み又は申込みの勧誘を行うものではなく、また、いかなる方法でもそのように依拠してはなりません。疑義を避けるために付言すると、SB ファンドは、他のファンド同様、SBIA とその関係会社によって運用されている SoftBank Vision Fund L.P. (文脈に応じて、あらゆるパラレル・ファンド、フィーダー・ファンド、共同投資ビークル又はオルタナティブ投資ビークル)と併せて以下「ビジョン・ファンド 1」)、SBGA とその関係会社によって運用されている SoftBank Vision Fund II-2 L.P. (文脈に応じて、あらゆるパラレル・ファンド、フィーダー・ファンド、共同投資ビークル又はオルタナティブ投資ビークル)と併せて以下「ビジョン・ファンド 2」)及び SBGA とその関係会社によって運用されている SBLA Latin America Fund LLC (文脈に応じて、あらゆるパラレル・ファンド、フィーダー・ファンド、共同投資ビークル又はオルタナティブ投資ビークル)と併せて以下「ラテンアメリカ・ファンド」)を含みます。

SB ファンド(ビジョン・ファンド 1 及びビジョン・ファンド 2 並びにラテンアメリカ・ファンドを含む)、SB ファンド運用会社、SB ファンド運用会社により運用される後続又は将来のファンド、SBG 又はそれらの関係会社のいずれも、本資料に記載されている情報の正確性又は完全性について、明示又は暗示であるにもかかわらずこれを表明又は保証するものではなく、また、本資料に記載されているパフォーマンスに関する情報は、SB ファンドその他本資料に言及される企業の過去若しくは将来のパフォーマンス又は SB ファンド運用会社により運用される後続ファンド、将来組成されるファンドの将来のパフォーマンスに関する確約又は表明として依拠してはなりません。SB ファンドその他本資料に言及される企業のパフォーマンスに関する情報は、背景説明のみを目的として記載されるものであり、関連する SB ファンド、本資料に言及される他のファンド又は SB ファンド運用会社により将来運用されるファンドの将来のパフォーマンスを示すものとして考慮されるべきではありません。SB ファンドの特定の投資対象に関する情報への言及は、それに含まれる範囲において、関連する SB ファンド運用会社の投資プロセス及び運用方針を説明することのみを目的として述べられたものであり、特定の投資対象又は証券の推奨として解釈してはなりません。SB ファンドのパフォーマンスは各個別の投資においてそれぞれ異なる可能性があり、個別に言及した取引のパフォーマンスは、必ずしも全ての適用される従前の投資のパフォーマンスを示唆するものではありません。本資料において記載及び説明される特定の投資は、関連する SB ファンド運用会社が行う全ての投資を示すものではなく、本資料において記載及び検討される投資が利益を生んだ又は将来利益を生むと仮定すべきではありません。

本資料に記載される SB ファンドのパフォーマンスは、ポートフォリオ投資の未実現の評価額に基づくものです。未実現の投資評価額は、関連する SB ファンド運用会社がそれぞれ特定の投資に関する状況に基づき合理的とみなす前提及び要因(例えば、評価日現在における類似の会社の平均株価収益率その他勘案事項等)を含みます。)に基づくものです。しかしながら、未実現の投資評価額が本資料に記載されている金額又は本資料に記載されているリターンを算定するために用いられる金額で実現されるという保証はありません。また、かかる実現に関連する取引費用が未知であるため、当該取引費用は、かかる算定に含まれません。未実現額の見積りは、常に変化する多くの不確定要素の影響を受けます。関連する SB ファンドの未実現の投資に対する実際の実現リターンは、いくつかの要因がある中で特に、将来の運用実績、処分時の資産価格及び市況、関連する取引費用並びに売却の時期及び方法によって決まるものであり、これらの要因は全て、関連する SB ファンド運用会社の評価の根拠となった前提及び状況と異なる可能性があります。

過去のパフォーマンスは、必ずしも将来の実績を示すものではありません。SB ファンド又は SB ファンド運用会社により運用される将来のファンドのパフォーマンスは、本資料に示されるパフォーマンス情報よりも大幅に低くなる可能性があります。各 SB ファンド又は関連する SB ファンド運用会社により運用されるいずれか将来のファンドが、本資料に示される実績と同等の実績を達成するという保証はありません。本資料に記載される第三者のロゴ及びベンダー情報は、説明目的のためにのみ提供されるものです。かかるロゴの記載は、かかる企業又は事業との提携又はその承認を示唆するものではありません。SB ファンド運用会社、SB ファンドのポートフォリオ会社、SB ファンド運用会社により運用される将来のファンドの将来のポートフォリオ会社、又は SBG が、本資料に記載されるロゴを有する企業又は事業のいずれかと今後業務を行うという保証はありません。SBGA 及び SBIA は、ビジョン・ファンド 1、ビジョン・ファンド 2 及びラテンアメリカ・ファンドの運用に関して、相互に SBG からそれぞれ別個独立した業務プロセスを採っています。SBGA 又は SBIA によって運用される SB ファンドは、それぞれ SBGA 単独又は SBIA 単独で運用されています。